

## 卷頭言

### 臨床哲学者・鷲田清一氏の“微かなめまい”に思う

住田 実

大分大学教育学部教授

Thinking about "Subtle Dizziness" by Clinical Philosopher Kiyokazu Washida

Minoru SUMITA

*Professor, Faculty of Education, Oita University*

朝日新聞コラム「折々のことば」でも著名な臨床哲学者・鷲田清一（わしだ・きよかず）氏は、浜田寿美男氏（発達心理学）の講演のなかで、共鳴を伴う“微かなめまい”を感じたという。

小学生のA君は、学校で「古い卵と新しい卵」を見分ける方法として、「割って黄身が高く盛り上がりっているのが新しく、平べったくなっているのが古い」と教わった。そして、それが試験に出た。

「図のような2つの卵があります。あなたはどちらを食べますか？」

A君は即座に「平べったい卵」と答えた。ところが、そのほかのクラスメートは全員、「盛り上がっている卵」に丸をした。正解は、後者の卵。「食べるなら、新しいもの」ということであった。不正解はA君だけ。しかし、彼は納得がいかない。

\*

私は、若い養護教諭を対象にした研修会や教職実践演習で、「なぜA君は納得がいかなかったのか」「問い合わせ適切か」についてグループ討議させてている。

A君によれば、冷蔵庫から卵を2つ取り出して、賞味期限に差があれば、「まずは古いほうから食べる」のが当たり前。ただ一人不正解にされた彼は、ひどく傷ついたという。

鷲田氏はA君の心情に思いをはせ、教育の現場に憤る。

この設問では、「どちらが新しいですか？」という問いかけが、なぜか「あなたはどちらを食べますか？」という問い合わせにスライドしている。この問いは設問として孤立していて、「何のために新しいか古いかを調べるのか」、それがわかったら「では、どうするのか」

というふうに、日常の生活に繋がらない。

「これに対して、ご両親が共働きのため自分で料理することも多かったお子さんは、はじめからそういう家事の文脈のなかでこの問い合わせをとらえていた。

人は何を食べるべきなのか、何が知るに値することなのか、それを知ることが生きるということにとってどういう意味をもっているのか。現代の『科学』や『教科』がえてして切り離しているその問い合わせを、このお子さんはきちんと視野に入れていた。臨床哲学は、この『ちいさな哲学者』の眼を忘れてはならないだろう。」  
(鷲田清一 「聴く」ことの力～臨床哲学試論～ 阪急コミュニケーションズ、p.266、傍点：引用者)

\*

私は上の「臨床哲学」の視点を養護教諭の教育実践にも置きかえてみたいと思っている。

本学会「養護教諭の専門領域に関する用語の解説集（第三版）」では、「養護教諭の『観』」は、「意図的に教育活動を行っていくうえでの根幹」であり、「働きかけていく対象をどのように理解して適切に捉えるか」が養護教諭の実践を左右していくとされている。述べるまでもなく、「観」は「すぐれた具体（実践）の集積」から生まれる。

「養護教諭は、児童生徒の身体的不調の背景に、いじめや不登校、虐待などの問題が関わっていること等のサインにいち早く気付くことができる立場」（文部科学省「現代的健康課題を抱える子供たちへの支援」）であるならば、そのためにも本学会は、子どもたちの成長と生活実感に寄り添い、具体レベルの豊富な実践集積をはかる存在であってほしいと願っている。